ウルリム
響
울림

聖公会生野センター機関誌

第30号
2004年2月15日発行

題字：康秀峰

URL http://www.nskk.org/province/ikuno　E-mail:ikuno@nskk.org

# 自分の場所から

高地　敬

以前、ウイリアムス神学館の夏の実習で聖公会生野センターにお世話になりました。神学生一人一人、釜ヶ崎での支援活動や生野の町工場などで１週間ほどお邪魔させていただき、大きな経験をすることができました。ありがとうございます。そのような時、私自身もある意味で実習していて、何のために実習に行くのか、そこで何を学ぶのかを考えさせられました。

『セプテンバー・11』という映画をご覧になったでしょうか。世界の11人の著名な映画監督がそれぞれ11分９秒の短編を作り、それが集められたオムニバスです。どの作品もタワーの崩壊に象徴される現代社会の病巣を明らかにしようとしているのですが、それだけでなく、必ず自分の今いる場所からそれを見ようとしています。

ボスニア・ヘルツェゴビナの作品は、ラジオのニュースに聞き入っている人々を尻目に、その日も女性の地位向上のための行進を黙って続けようとする一人の女性の姿を静かに追っていました。ラジオのアナウンサーは、「この事件は、全人類にとっての悲劇でもあります」と言っていました。これは、この事件に全人類が注目せよとの意図で言われているのですが、すべての悲劇的な状況を象徴する出来事だったという意味でも受け取ることができます。だからこそ事件だけでなく、それぞれの状況に光が当てられなければならない。

私たちは多くの場合、抑圧、被抑圧という関係から逃れられることができません。実習の現場から学ぶのは、その場の課題であると共に、身近な課題です。問われているのは社会であると同時に、自分の場所であり、常に自分なのだと実習に行くたびに感じます。自らを振り返らないのであれば、学ぶ意味はありません。人を大切にしていない自分に気づくことはとても恐ろしいことですが、弱さを抱えた自分に気づくときに初めて神様の恵みを一杯に受け、他者に向かうのだと思います。

（こうち・たかし　日本聖公会京都教区主教）

もくじ

1　自分の場所から……高地　敬
2　特集　あるハガキの問いかけ……ウルリム編集委員会／井田　泉
4　時のしるし　「平和の福音」を受けし者の使命……西原廉太
5　韓国市民の眼⑨　迷惑な政治家よ、さようなら……姜　恵　楨
6　多民族・多文化共生のすすめ⑨　在日同胞問題と韓国の民主化との関係……金　光　敏
7　詩　「サラムの顔」……丁　章
8　こんな本あります　本から「在日コリアン」を考える⑯……高　二　三
9　映画　自転車でいこう　―街を駆け抜ける―……呉　光　現
10　読者の声／生野のまちかど／余韻

# あるハガキの問いかけ

呉光現殿
響には極悪非道な北朝鮮の拉致事件について、北朝鮮に対し何らの強硬な非難の記事もないのは極めて残念で溜まりません。日本に居ながら、北朝鮮の拉致事件を強く非難したくないのなら、韓国へでも北朝鮮へでも、さっさと帰って下さい。後援会費なんて払いたくありません。
（匿名、消印03.9.16阿倍野）

## 「脅迫状」を書いた方へ

ウルリム編集委員会

2003年９月。このような手紙が聖公会生野センターに届きました。

この手紙は、ワープロで書かれた紙がアンケート欄に貼られ、あたかも筆跡から差出人を特定されないようにしているかのようで、悪意を感じました。

また、「後援会費なんて払いたくありません」とありますが、後援会費は、趣旨に賛同くださった方々からのお気持ちですから、払わなければならない会費ではありません。なのにわざわざ書いてあるのが不思議でなりません。この方はどこでウルリムをご覧になったのでしょうか？

ウルリムを読まれているのであれば、きちんと聖公会生野センターとしての考えを伝えることが大切だ思い、あえてこのような特集記事として掲載することにしました。

この手紙は、北朝鮮が日本人の拉致を認めた日朝首脳会談以降おこった在日韓国・朝鮮人に対する脅迫や嫌がらせと同じ偏見を元にしたものです。

拉致という行為は重大な人権侵害ですが、それと同様に「韓国へでも北朝鮮へでも、さっさと帰れ･･･」という発言は在日韓国・朝鮮人の歴史・生活を無視した脅迫です。このような脅迫は、80年代に起きた、指紋押捺拒否者への脅迫状にもありました。

日本に住むなら「拉致事件を強く非難」するべきだ。という考えは、なまみの生活者としての一人ひとりを見ずに、民族や国家全体をひとくくりにし偏見をもって見ています。これは、大きな人権侵害を犯した植民地時代のものと変わりなく、差別と偏見に満ちています。

1945年８月15日の日本の敗戦、朝鮮の解放以来50年以上も経った今、日本で暮らす多くの在日韓国・朝鮮人は日本の地で生まれ育っています。その生まれ育った地を離れることはとても難しいことです。それはそこに家族があり生活があるということです。ですから、「韓国へでも北朝鮮へでも、さっさと帰れ」ということは、その生活や家族を破壊することであり、拉致し生活と家族を破壊することとなんら変わりありません。家族と生き別れ、家族と会いたくても会えない生活を余儀なくされているのは在日韓国･朝鮮人の歴史そのものであって、権力による分断の被害者です。このような発言は、あまりにも歴史に対して無責任です。

一人ひとりの生活を壊し家族を分断する行為は決して許されるものではありません。ですから、戦争も拉致もそして脅迫もしてはいけないことです。

差別と偏見はそれを受ける人を苦しめるだけではなく、それを加える人、それを無視する人の心の問題・社会の問題を意味します。

一人ひとりが大切にされる社会の実現のために、このような脅迫的行為を決して行なわないよう、そして一人ひとりの歴史と生活を尊重するよう、強く訴えます。





## 「拉致事件」についてアンケート発言された方へ

井田　泉

「ウルリム」の編集部からアンケート葉書を見せていただきました。

北朝鮮による拉致事件についての憤りには私も同感です。一度しかない人生を踏みにじられた方々のことを思うと、ほんとうに許せません。これは言わば「金日成－金正日王朝」による国家犯罪です。「ウルリム」においてもこの問題について真摯な意見交換がなされる必要があると思います。

ただ、どうしてもあなたの発言に対して申し上げたいことがあります。それは「日本に居ながら」「韓国へでも、北朝鮮へでも、さっさと帰って下さい」とおっしゃっていることです。「日本に居ながら」というのは「我々はあなたたちを日本におらせてやっているのだ」と聞こえます。これは事実誤認に基づく言葉ではないでしょうか。韓国・朝鮮人が日本にいるのは、日本国家が朝鮮の人々に暴力を振るい、故郷・家族・友人から離れざるを得ないようにした植民地支配の結果です。この人々の生活基盤を日本国家が奪ったのですから、日本国家がしかるべき補償をするのが当然であり、少なくとも日本で暮らしにくくないように努力すべきです。「寄留者を虐待したり、圧迫したりしてはならない」（出エジプト記22:20）という聖書の言葉を心にとめようではありませんか。それに「日本に居ながら」というのは、日本に居住する者は単一の考えを持つべきだ、という思いが背景にあるように感じられて、私はとても落ち着きません。「日本は単一民族、単一文化、単一価値観の国」と言われているような気がするのは考えすぎでしょうか。

ところで私は最近、ある人の言葉によって頭に血がのぼって気を失いかける経験をしました。それは、その言葉が私の存在を許さないような響きとして私の体に伝わったからです。しかし私は自分の仕事も立場も住まいも家族も失ったわけではありません。せいぜい体調を崩して休養する程度です。けれども「韓国へでも、北朝鮮へでも、さっさと帰って下さい」というのは、在日の人たちの生存を許さない言葉です。「あなたたちはここに生きていてはいけない、存在してはいけない」と言っていることになります。ここにしか生きる場のない人たちをここから追放しようとするのは、その人々のいのちを脅かすことです。イエスに向かって、憎しみをもって石を振りかざした人たち（ヨハネ10:31）と同じになってしまうのではないでしょうか。

初めにも言いましたように、拉致事件は北朝鮮の国家犯罪です。私たちは国家の責任を問うべきであって、在日の人々に非難を向けるのは誤っています。いつの間にか拉致被害者の方々のことよりも「一億二千万の日本人被害者」の一体感情が溢れかえって、その結果ある人々を排除し、日本の戦争体制づくりが着々と進行していることを憂えています。

（いだ・いずみ　京都復活教会牧師）

# 「平和の福音」を受けし者の使命

西原廉太

新年に入り、ついに陸上自衛隊がイラクへ送られる事態となった。キリスト者平和ネットを中心として、多くのキリスト者が、米英のイラク軍事戦略にこれ以上荷担することがないことを願い、祈りを合わせてきたにも関わらず、何の正当的根拠を持たない「なし崩し」がまかり通る。ブッシュ大統領はそのイラク侵略正当化の「大義」を何と語ってきたか。最初は「国連決議」、次に「大量破壊兵器」。そしていざ戦争をはじめて、大量破壊兵器なるものが一向に見つからないとなると、ついには「イラクの民衆をフセイン独裁から解放すること」と開き直った。イラク侵攻には一片の「大義」もなかったことは、もはや覆い難い事実である。そんな大義なき侵略行為に、日本政府は一貫して支持を与え、米英に媚を売り続けた。そしてついには、武器を担いだ軍隊（もはや「自衛」隊ではないであろう）をイラクに派遣するにまで至るのである。日の丸をつけた軍用車が目指す場所は、決してイラクの民衆ではなく、ブッシュの顔色と憲法改悪なのであろう。私たちが「軍隊の論理」を否定する根拠は、平和憲法だけにあるのではない。

本来は、私たちの信仰の確信として、絶対平和の思想がなければならないはずである。

かつて、日本聖公会をはじめとして多くのキリスト教会は、日本の侵略戦争を押しとどめることができず、むしろ積極的に加勢したという痛恨の経験を持つ。前回の本欄でも、天皇制軍国主義を補完した先達のことを書いたが、ある読者の方からこのようなお手紙をいただいた。「私は戦争中、兵隊として外地に行った経験から、現在平和の大切さを痛感していますが、当時、何をどう主張し、どう行動すべきかを、もう少し深く掘り下げて御教示して戴きたい」。実際にあの戦争を経験された方からすれば、当時の状況を何も知らない若造が何ゆえに苦労した先達を批判できるのか、と思われることは当然であろうと思う。また、現代の価値観をもって、過去の出来事をあれこれ論じるのはアンフェアーであるというご意見をも良く拝聴するところである。

大切なことは、戦前、戦中の言語に絶する圧力の中にあっても、「何をどう主張し、どう行動すべきか」を明確に発言したキリスト者たちが少なからずおられた、という事実である。例えば、無教会キリスト者の石原兵永さんは、このような言葉を1932年に記している。「今や地上にあるものは、平和ではなくて、戦である。戦の噂である。戦の不安である。戦の準備である。武器の製造改善である。飛行機の製作である。軍事知識の普及、軍国精神の鼓吹である。平和は将に地平線下に没し、虚空の風に消散し、平和の福音は、それを信奉する基督信徒の心の中に黙殺されつつあるのだ。然らば、神は我らを欺き、聖書の言は我らを偽ったのであるか。平和の君は無益に地上に生れ、約束されし平和の福音は夢であったのか。否、否、否、然らず。聖書は間違ってはゐない。誠実なる神は我らを欺き給はなかった。平和はまさに地上にある。何処にあるのか。平和の福音を受けし人の衷に宿る。平和は福音と偕にある。活ける神の子キリストと偕にある。力強き永遠不壊の平和が存するのである。然かも之決して理由なき平和ではない。」

石原さんの願いも空しく、その後、日本は戦争に突き進むことになる。しかしながら、苛酷な官憲の尋問を受けることになっても、このように戦争の論理を拒絶し、平和の福音を高らかに歌いあげたキリスト者がおられたということを、今こそ私たちは記憶に刻まなければならない。「今や地上にあるものは、平和ではなくて、戦である。戦の噂である。戦の不安である。戦の準備である。」この70年前の不安は、そのまま現在の私たちの不安と置きかえられる。問われていることは、このような状況の中で、「約束されし平和の福音は夢であったのか。否、否、否、然らず」と心の底から叫び続けることにあるのではないだろうか。それこそが、「平和の福音」を受けし者の使命なのである。

（にしはられんた・中部教区司祭、立教大学教員）





# 迷惑な政治家よ、さようなら

姜恵楨

アジアへの嫌がらせのパフォーマンスだろうか。正月早々、小泉首相の靖国神社参拝のニュースで、2004年のスタートは不快極まりないものとなった。「靖国神社で平和を噛みしめた」と小泉首相は語る。替え歌でもあるまいし、平和の意味を書き換えてはいけない。日本の首相のこの政治行為は、一昨年の年初め、人類への呪いのように「今年は戦争の年」と宣言したブッシュ米国大統領の言動にも匹敵する、国際的ないじめである。

そういえば、日米両国の首脳は益々似てきているという感を否めない。国際社会の反応など気にも留めず我が道を突き進むやり方といい、軍事安保の拡大を国内統合と国際社会での影響力強化の手段とする政策といい、ソックリさんである。一方、韓国では政権についた改革勢力が、東北アジアの閉塞した状況に風穴を開けることが期待されたものの、期待は裏切られた。この一年間、韓米日軍事同盟を支える外交から脱することなく、国内政治においても政権基盤の薄い与党は政策遂行上の未熟さばかりが目立った。

そんな韓米日三カ国が今年はそれぞれ国政レベルの選挙を控えている。４月の韓国国会議員総選挙、７月の日本参議院選挙、11月の米国大統領選挙である。

総選挙を前に、韓国では様々な市民運動団体が政治改革実現のための取り組みに励んでいる。その動きには大きく三つの流れがあるといえよう。第一の落選運動は、反改革・腐敗議員のリストを発表し、彼らを政党推薦や選挙で当選させないための取り組みである。落選リストは、全ての国会議員の議会出席日数、改革的法案への投票内容、議会活動、汚職など膨大なデータ検証に基づいて作成される。この運動は４年前の総選挙当時、市民の絶対的支持を集め、リストに挙がった候補の70%が落選するという成功を収めた。第二の当選運動陣営は「国民候補選択運動」を標榜している。市民の視点から候補者評価の基準をつくり、その基準を満たす候補は積極的に支持していく。女性界も女性の政治参加を高めるべく、優秀な女性がいないという論理への代案として、社会の各分野で能力を積んできた「女性候補100人」を提案している。そして、第三の選挙監視運動陣営により、クリーンな選挙のためのモニター活動が展開される。

一方、韓国の進歩的学者チョウ・ヒヨン氏（聖公会大学）のアイデアにより、米国大統領選に向けた国際連帯市民運動として動き始めている「ブッシュ落選運動」が興味深い。昨年から可能性が模索されてきたこの運動は、世界1600の団体・10万人参加規模で１月にインド・ムンバイで開かれた、世界社会フォーラム（WSF）でも提起された。その場では活発な議論が巻き起こり、世界中の様々なグループがネットワークを具体的に形成する上で成果があったと伝えられる。大風呂敷を広げる話ではない。その愉快な実践アイデアの紹介は割愛せざるを得ないが、選挙の結果に関係なく、この運動は国際市民社会に全く新しい経験と蓄積をもたらすことであろう。投票行為自体は米国の有権者にのみ託されるわけだが、ブッシュに象徴される戦争・軍事主義への反対を多くの国々の市民が共有し、実践的につながるという経験である。

昨年の日本衆議院選では、当選議員の70%が改憲に賛成、17%が核武装の検討に前向きであったという。このような状況での今年の参議院選挙は、日本の危ない動きを少しでもくい止める上で重要な意味を持つ。日本の市民社会は、この選挙をどのように迎えるのだろうか。

「選挙という局面」はその社会が守り継ぐべきこと、絶対に譲ってはいけないことを、全体的な公の議論として確認し示すことができる最大の好機である。選挙権を持つ人々の一票にだけ決めの手を委ねるにはもったいなさ過ぎる。誰もが情報発信者となり得るインターネットの時代においては、なおさらのことだ。

希望が遠ざかって見え、状況打開が難しいときは、消去法もなかなか有効なものだ。韓米日の迷惑な政治家にはお家に帰っていただき、さようならを告げられる一年にしたい。

（かん・へじょん　日本の教科書を正す運動本部（アジアの平和と歴史教育連帯）国際協力委員長）

腐敗政治家にレッドカードを！（韓国、2000年）

# 在日同胞問題と韓国の民主化との関係

金光敏

この間、立て続けに韓国に招かれ、講演やセミナーに出席した。関西圏を主なフィールドにしている私たちが韓国のシンクタンクや市民団体から招かれることは、取り組みが評価されてのことと考えている。

私は、青年期の一番多感な時期を韓国で５年ほど過ごした。その当時の韓国は、軍事独裁体制と民主化のちょうど狭間の頃で、「国家安全企画部」はまだ羽振りを利かし、連日のように「国家保安法（反共法）違反」を理由に様々な運動家が拘束されていた。韓国の地で祖国の現状をつぶさにした私は、街頭や集会で民主化が一刻も早く前進することを祖国の人々とともに訴えた。

私が韓国にいた頃は、盧泰愚政権時代で「第６共和国」と呼ばれる。「６共」とは、６番目の憲法を指し、泣く子も黙るとされた軍事体制全斗煥政権を「５共」、強権の限りをつくした朴正熙維新体制を「４共」、朴正熙執権から維新までを「３共」、４・１９民衆革命によって発足した張勉政権（尹普善大統領時代）を「２共」、韓国における反共体制の出発点となる李承晩政権を「１共」と呼んでいる。

第６共和国時代は、独裁体制から民主化体制に移行する過渡期で、国内では独裁か、民主化かの熾烈な闘いが激しく続けられていた。先日、聖公会生野センター主事の呉光現さんの誘いで、ともに会食をさせていただいた詩人朴ノヘさんが、社労盟事件で拘束され、「国家保安法違反」で死刑判決を受けたのもこのころだった。

一方、戦後補償問題が脚光を浴びたのもこのころである。戦後補償問題は日帝の朝鮮植民地支配の清算問題であるために、独裁体制を支えてきた植民地協力者たち、すなわち親日派たちの政治的正当性を揺らがしかねない問題を抱えていた。そのため植民地支配清算問題は、時の政権の安全保障問題でもあった。強権体制下で押さえられてきた戦後処理問題が脚光をあびるようになったのは、民主化進展の可能性を象徴し、日本で言うところの「戦後」が、韓国においてはようやく90年代に訪れたことを示す。

実は、私が韓国に招かれることとこの問題は結びついている。韓国政府は、植民地支配の延長である在日同胞問題の真の解決をめざしたことはない。そうした見方は本国の人々にも影響し、在日同胞問題の矮小化が意図的に図られてきた。それが「本国でも差別される在日」というような日本社会における歪んだ在日観を生み出した。

しかし、民主化の進展でいまようやく在日問題についての認識が深まりつつある。それは在日問題だけではない。在中や在ロをはじめとした世界に離散した同胞たちの人権や生活問題に韓国社会が関心を示し、すべきことの模索を始めている。

私が話す在日同胞の子どもたちの様子、民族教育の実態に、本国の人々は少なくない衝撃を受ける。あまりに無関心すぎたというものだ。韓国社会に在日同胞の子どもたちの様子が伝わり、同胞の子どもたちの人権状況の改善につながればと思う。私たちのポリシーは、子どもたちを「一人ぼっち」にしないこと。韓国社会が在日問題を知ることは大切だ。

そのためには、私らなんでもしまっせ。悪いですが、韓国社会も同胞の子どもたちのために一肌脱いでもらいましょか！

（きむ・くぁんみん　民族教育文化センター事務局長）





# サラムの顔

丁章

サラムの一部に
朝鮮人があって
日本人があって
サラムの顔には
朝鮮人の表情と
日本人の表情と
調和をととのえ
浮かぶけれども
サラムの一部でしかない
日本人の表情にしか
目線がゆかない人々がいて
サラムは微笑んでいるけれど
朝鮮人の表情が
悲しんで憤りながら
にらみつけても効き目なく
しかたがないから

サラムの一部でしかない
朝鮮人の表情で
発言したならば
まなこひんむいて
驚いた人々から
石を投げられ逃げられた
朝鮮人の表情は泣いたし
日本人の表情も憤ったし
サラムの心も波打ったが
穏やかに微笑んでいたいんだ
サラムとして

サラム：朝鮮語で사람と書き「人」という意味である

詩集「マウムソリ　―心の声―」より

丁　章　（ちょん・ぢゃん）
1968年、京都市にて出生
大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業
現在、大阪府東大阪市在住

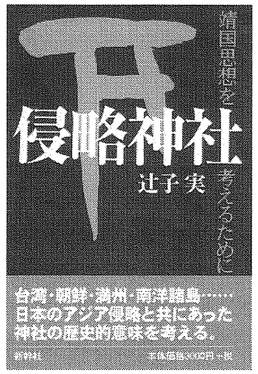
著書
詩集『民族と人間とサラム』（新幹社）
詩集『マウムソリ　－心の声－』（新幹社）

『民族と人間とサラム』と『マウムソリ　―心の声―』は聖公会生野センターで取り扱っています。

# 本から「在日コリアン」を考える ⑯

高　二　三

## 侵略神社
### ー靖国思想を考えるためにー




**辻子　実**
**定価3,000円+税**
**新幹社**

普通の人々は２月11日の「建国記念の日」をどんな気持ちで迎え、過ごすのだろうか。

私に関して言えば、休日が一日増えただけにすぎない。それは私がまだ中学生だった頃（1966年）、第二次世界大戦後廃止されていた「紀元節」が、「建国記念の日」と名を改めて制定されたことを覚えているからだろう。そもそも「紀元節」とは、神武天皇即位の日を設定して1872（明治5）年に祝日と制定したのだそうだ。日本の祝日に天皇制がらみ以外のものがない、とある友人が言っていたが、ほんとうだろうか。2月11日は、「建国記念の日に反対する日」としてすごしたいと思う。

１月下旬、「建国記念の日にこの本を置いてみませんか」と銘打ったチラシを全国の書店500店にFAXしてみた。近刊の『侵略神社』の書評を集めたチラシを作成したので急に思いついたのだ。結果は20店から46冊の注文を得た。これは多い注文数なのかどうか、判断はむずかしい。

正月の初詣に小泉純一郎日本国総理大臣が靖国神社へ行った。初詣は日本の"古き良き"風習なのだそうだ。日本の“古き良き”風習も神社や天皇制がらみなのか、とふと考えてしまう。小泉総理の詭弁は、日本の風習という言葉で侵略戦争を隠蔽しようとしていることが見え見えである。そしてこのようなことが平然とまかり通って、人気ドラマに見られるように“古き良き”という言葉まで一人歩きしようとしている。

だが、本書『侵略神社』をみていただきたい。台湾、朝鮮、中国、南洋諸島……日本がかつて武力でもって侵略していった先々に建てられていった神社の数々（到るところすべてと言っていい）、その侵略神社の写真が無言のまま250枚並んでいる。いまはもうそれらの侵略神社の姿はあとかたもない。日本軍がこわしていったものもあるが、ほとんどが支配から解放された人々によって打ちこわされた。

どんな詭弁を弄そうとも、この写真に残された事実は消せない。侵略戦争とともに神社は建てられ、支配とともにそこに住みついた日本人の精神的な支柱となった。そしてまた、現地に住む人々にも侵略戦争への加担を強要し、支配していく手段ともなったのである。

読者から『侵略神社』の「侵略」はタイトルとしてドギツイとの声もあった。そこにはいつしか「侵略」を「進出」とおきかえ、それがあたりまえのようになってしまっているという現実がある。「侵略」を「侵略」と呼んでこそまともな平衡感覚なのだ、と著者ともども出版者は思う。

東京を中心に配布されている情報誌『月刊 아리랑（アリラン）』に著者である辻子実さんと『侵略神社』が10ページにわたって紹介された。なぜ10ページにも及んだかというと、本書には朝鮮半島に建てられた神社の写真も満載されているので、主な写真を選んだだけでも10ページになってしまったのである。故郷に建てられた神社を見て、朝鮮人はどう思うのだろうか。二度と思い出したくないという気持ちになるだろうか。だが、あえて、日本人が本当に侵略戦争を反省し、新たにアジアとの向き合い方を作るため、本書はどうしても必要な本だと思うのである。（「建国記念の日」や「終戦記念日」にこそ本書を開いて欲しい。

なお辻子さんは中目黒の恵泉バプテスト教会の教会員である。指紋押捺拒否闘争の時以来のとても信頼している友人である。その彼が集めた侵略神社の写真には彼の強い意志が感じられる。

（こ・いーさむ　新幹社代表）

『侵略神社ー靖国思想を考えるためにー』は
聖公会生野センターで取り扱っています。
TEL 06-6754-4356　FAX 06-6754-4357
e-mail : ikuno@nskk.org





# 街を駆け抜ける

呉光現

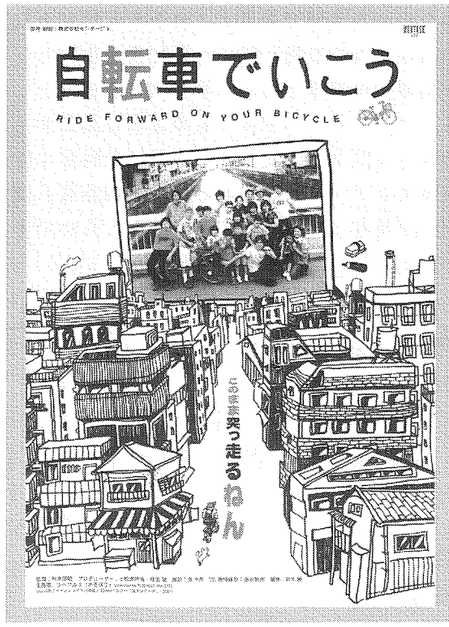
街を駆け抜ける自転車とイー・プーミョン。彼の強烈なキャラクターとそれに離されまいとするカメラ。この映画はプーミョンとカメラ、監督、スタッフのバトルである。生野という街はしばしば障害者に出会うところである。これは20年以上にわたる地域での取り組み・バトルの成果？いやそれは1920年代から異質なる朝鮮人を好き嫌いは別にして受け入れてきた生野の街の結果かもしれない。“異質なる者”を受け入れることはやはり時間と体験の積み重ねが必要なのだろう。プーミョンは今21歳。この20数年の生野のうごめきがこの映画につながった。

特別と普遍。プーミョンが駆け抜ける生野は私が育った街でもある。ごちゃごちゃとした町並み。真ん中を流れる汚れきった平野運河。この街、運河もプーミョンが生まれた頃よりもずいぶんきれいになった。これからもここはプーミョンにとって魅力ある街であり続けるのだろうか？

彼のこだわりは多くの人を巻き込む。それは“障害に理解ある人”だけでない街の人々である。それも乳飲み子から70代までの幅の広さだ。私は一つ気がついた。プーミョンと関わる多くが働いている人々である。彼の“仕事”はまさに“働く人”との関わりではないか。カメラはプーミョンの“働く姿”を追いかけていく。この映画は生野、知的障害、自閉症･･･、と言った“特別なこと”を追いかけているが、実は普遍的な力を持っている。観る人を思わず笑わせてしまう。彼のキャラクターが笑いを呼び、私たちの力につながっていく。そしてそれは多くの自閉症の子どもを持つ親、それに絡む人々に力を与える魅力なのだ。この映画にぶつかった私たちは目の前を駆け抜けるプーミョンとその後に身体に強烈な臭いが残される。まるで平野運河の強烈な臭いのように。それは生きる力に結びつき、普遍を持つに到った。普遍性を持ったこの映画は時を越えて語り継がれて、観ていかれるだろう。

又、生まれ育った生野が好きになった。

（お・くぁんひょん　聖公会生野センター総主事）




**ー上映館ー**

大阪
第七藝術劇場　TEL06-6302-2073　～2/27
動物園前シネフェスタ　TEL06-6647-7188　3/6～

名古屋
シネマスコーレ　TEL052-452-6036　2/21～3/5

新潟
シネ･ウインド　TEL025-243-5530　3/27～（予定）

この映画をみなさんの手で上映してみませんか？
16mmフィルムをどこへでもお貸し出し致します。

2004年4月より貸し出し開始
仕様:16ミリ/カラー/スタンダード/115分
お問い合わせ：㈱モンタージュ
TEL: 03-3303-9871　FAX: 03-3303-9824
e-mail: jitensya@montage.co.jp

## 読者の声

私は日本聖公会京都教区の岸和田復活教会の信徒です。精神障害者手帳（２級）をもっています。生野センターが精神障害者のために多くの活動をしているのでよいと思います。また私は1959年に生野区猪飼野中２丁目（当時）で生まれ７歳まで在日社会で育ちました。曺智鉉さんの「写真集･猪飼野」も面白く拝見しました。北朝鮮情勢が緊迫していますが、主のみ心に叶う方向に行く様に祈っています。私は日本国籍ですが、これからも生野センターの活動を応援していきます。主に感謝。（空信一）▼メディアで取り上げられることだけがこの世で起こっていることのように錯覚してしまっている自分を気づかされます。生きている我々のそばにある現実に目を向けなくっちゃ。見えずらくなっていることとか多いけど、きちんと気づくことができるように心を養わなくっちゃ。（弱い自分も大切な自分かも…）ウルリムはそう語りかけてきました。（山田真弓）

## 生野のまちかど

### お風呂屋さんの街　生野

生野は銭湯の多い街です。大阪市内では最も多く60軒以上あります。聖公会生野センターの近くにも３軒の銭湯があり、気分によって行く銭湯をを変えている人もあります。銭湯は、単に体を清潔に保つために行く場ではなく、日々の楽しみであり、一日の疲れをとるリラックスできる場でもあります。肩書きや世代を越えた地域のコミュニケーションが生まれています。

## 余韻

■今号のウルリムの記事の大半に戦争・平和に関わる文章がある。執筆者の多くが「平和」に対する危機感を持っているのだろう。私も同感である。■今回は投稿に対する応答を２、３ページに特集という形で載せた。そして西原さんの記事にもアンケートハガキに対する応答がある。「脅迫状」に対する応答は残念なことだが、西原さんの記事などはウルリムの読者と私たちのキャッチボールであり、つながりを実感できる。これからも読者と双通行の紙面作りを目指したい。■聖公会生野センターが地域の障害者と関わり早10年になろうとしている。アンケートハガキでも障害者の関連する記事のリクエストがよく来る。次号では特集で聖公会生野センターとか関わりのある「障害者」関係の記事を特集（といっても２ページくらいですが）をします。乞期待（？）（ぴっくゎんちゃ）

### 聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇後援会費
年額　1口 3,000円（個人）　1口 10,000円（団体）
・郵便振込00960-0-133429「聖公会生野センター後援会」

◇自由献金・クリスマス献金
・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
・銀行振込 ＵＦＪ銀行 東大阪支店
普通預金　3711311「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター
〒544-0003
大阪市生野区小路東1-17-28
TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357
E-mail: ikuno@nskk.org
http://www.nskk.org/province/ikuno
発行人：松　原　　栄
編集人：大　橋　　襄

ウルリムは古紙100%の再生紙を使用しています。